

## 中東フリーランサー報告

(第30回)

中東フリーランサー

### <目次>

1. 伸長著しいサウジアラビアのツーリズム
2. 株式市場メルトダウンと湾岸不動産市場
3. 「トリプル・タラク」オンライン(ドバイ王女の SNS 離婚宣言)
4. イラン女性達へのエール? イラン・イスラエル合作映画「TATAMI」

—————\*—————\*—————\*—————

今回はサウジアラビア水着ショーの話題ですっかり紙数を蕩尽してしまいました。私のような古い世代の中東ウォッチャーにとっては衝撃的なニュースでしたが、しかしサウジアラビアの若者たちはごく自然に受け止めており、抗議のデモが起きたなどと言う話は全く聞こえて来ません。やはりサウジアラビアの意識改革には、単に MbS 皇太子の剛腕だけでなく、ネット世界の影響力が実感されます。中国人の友人が「知らないことは無いことと同じです。」と言っていたのを思い出しますが、サウジ世界も、今までの社会秩序が保たれていたのは、強制的な因習の中に閉じ込められていたと言うだけでなく、知らされていなかったことが最大の抑止力だったのだと思います。MbS の一声は、権力の大きなレバレッジであったことは確かですが、同時にネット世界が過去の規範を易々と塗り替えて行ってしまった。水着ショーはその視覚的な象徴だったような感じがします。

### 1. 伸長著しいサウジアラビアのツーリズム

上記に限らず、サウジアラビアのツーリズムへの布石は着々と成果を挙げているようです。サウジ政府観光省の年次統計によりますと、2023 年のサウジアラビアへの外国人訪問客(インバウンド)は 27 百万人に達し(日本は 25 百万人)、その消費額は 1,410 億サウジアリアル(376 億ドル相当)であった由。日本のそれは 5.3 兆円だそうです(日本政府観光局)、2023 年のドル円為替の年間平均 140 円(MUFG 発表)で換算すると 5.3 兆円となり、早くも日本並みです。

来訪客の国別内訳を見ると、最大は GCC 諸国からの 8.6 百万人で、そのトップがバハレンの 3.4 百万人。続けてクウェートの 2.3 百万人と言うのは、両国との歴史的関係からすればなるほどと言う印象ですが、これに続く UAE が 1.4 百万人、カタール 1.1 百万人、オマーン 45 万人とぐっとレベルが下がるのは、「まあ、敢えて行かなくとも・・・」と言う雰囲気を感じさせます。

一方国内観光客は 82 百万人で、人口(32 百万人、外国人を含む)の 2.5 倍超ですが、これは延べ人数ですので、リピーターの多さを物語っています(消費額は 1144 億サウジアリアル=305 億ドル)。いずれにしても、観光産業が着実に伸びていることは間違いなく、GDP 比で言えば、1.1 兆

ドル(世銀)のサウジアラビアと、4.2 兆ドル(内閣府)の日本とでは、その影響力は 4 倍です。石油産業に比べれば、労働集約型の観光産業は雇用への効果が遥かに高く、MbS の「ビジョン 2030」は着々と結果に繋がっています。ただし、27 百万人のインバウンドの内 15 百万人(56%)はメッカ詣ですので、まだまだイスラム観光が中心ですが、日本のツーリズムも歴史的には「お伊勢参り」から始まったのですし、世界的にも聖地巡礼は最大の観光動機ですから、まっとうな流れと言えますでしょう。GCC 以外のインバウンド客も、エジプト 2.6 百万人、パキスタン 2.5 百万人、インドネシア 1.8 百万人と、イスラム教国が中心で(どうしてもハッジ中心になる)、実際 42%は宗教目的と答えており、純レジャー目的は 23%にとどまります。しかし MbS の目線の先にあるのは、NEOM のような「通年型脱イスラム観光」による安定収入源の確立ですから、今後の観光産業の成否は重大で、こんな時に中東地政学リスクなどんでもないと言うのが本音だと思います。

そうした脱イスラム観光のトピックとして、7月から8月にかけて大々的に開催されたのが「e スポーツワールドカップ」です。賞金総額 6000 万ドル！と破格で、サウジアラムコが全面バックアップしました。<https://esportsworldcup.com/en> 酷暑の中東に屋内の e スポーツは適しています。サウジアラビアは e スポーツに早くから注目しており、サウジ e スポーツ連盟が「Gamers8」と言う大会を組織して来たのですが、「e スポーツワールドカップ」はその後継拡大版で、ビジョン 2030 の目玉にまで昇格した次第です。

競技内容はいくつかのカテゴリーに分かれ、それぞれに億円単位の賞金がかかっており、競技の興奮度を高めます。どの競技が何なのかよくわかりませんが、最高賞金ゲームは「DOTA2」で、



150 万ドルゲットの「ゲーミン・グラディエーター」

ゲーミン・グラディエーターチームが優勝し、賞金 150 万ドルをゲットしました。競技者はリヤドの現地会場に参加しなければなりません。上記サイトを見ると、広くオンラインチケットを販売しており、観る方は国外でリアルタイムで戦いを楽しめると言う仕組みです。まさにバーチャル観光産業と言いましょか。ただこれでは観光収入にはなるでしょうが、インバウンドの雇用創成には繋がりません。

まあそれでも、こうしたアーバンスポーツを愛する若者たちがこれからのトレンドリーダーになると考えれば、彼らがサウジアラビア経験をポジティブに捉え、世界に発信することで、若者の間で新たなサウジアラビア像が生まれる可能性は大きく、それこそ未来を見据えた最も効果的な投資になると言えるでしょう。先の短い年寄りの脳みそを無理やり変えるよりもよほど効果的？

ただ欧米政界やメディアのポリコレ組は未だにカシヨギ事件に執着しており、こうした取り組みも「スポーツウォッシングだ」と切り捨てるばかりで聞く耳持たずは相変わらずです。殺人を厭わぬ独

裁者のレッテルを貼られた MbS は、何をやろうが「××ウォッシングだ」との反応しかありません。しかし、企業トップと違って王様が頭を下げる相手はおらず、ましてや引責辞職なんてありません。MbS の責任を追及するなど所詮ナンセンスで、いつまで経ってもメディアの溜飲は下がりません。そうこうする内に、世界の有力企業はこぞってリヤドに地域本部を構え（サウジ政府に脅された面はあるものの）、遂には米大統領まで油乞いに駆けつける始末ですから、MbS の「欧米世論対策」は世代交代を待ってさえいれば良いのかも知れません。その頃にはヤングゲーマーのような、サウジアラビアで刺激的体験をした若者たちが主流となり、サウジアラビアのイメージも変わることを MbS は狙っているのでしょう。彼にはそれを待てる若さと言う最強の武器があります。

## 2. 株式市場メルトダウンと湾岸不動産市場

そんなことよりも、サウジアラビア、そしてなによりも UAE が肝を冷やしたのが、8 月初旬の「株式市場メルトダウン」(アラブタイムズ紙)でした。8 月 5 日はまさしく本レポートの連載開始のきっかけとなった 2009 年の「ドバイショック」の悪夢の再来がよぎった日となりました。

### Market Data

COMPANY	VALUE	VOLUME	PRICE	PRICE CHANGE
EMAAR	209,689,799.38	27,117,012	7.750	0.640 ▼ (7.628%)
DIB	95,854,712.04	16,819,394	5.650	0.270 ▼ (4.561%)
EMIRATESNBD	53,191,044.70	2,899,773	18.350	0.700 ▼ (3.675%)
DSI	45,120,691.46	126,870,622	0.350	0.038 ▼ (9.794%)
EMAARDEV	38,053,586.09	4,966,812	7.580	0.700 ▼ (8.454%)
AIRARABIA	27,919,390.82	11,704,907	2.330	0.220 ▼ (8.627%)

### Market Statistics

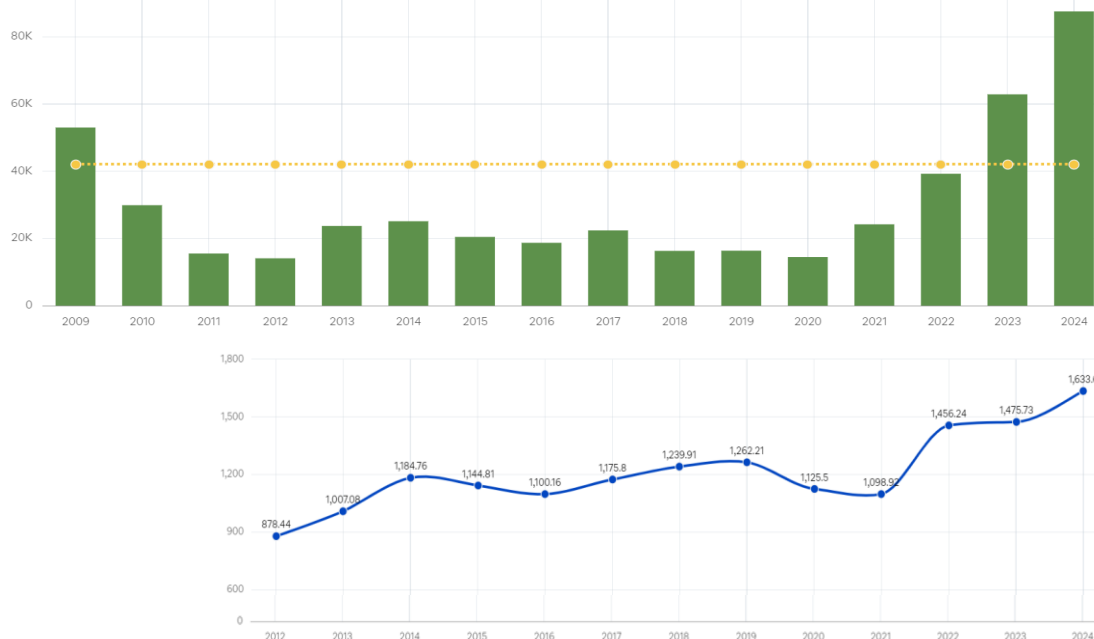


上記の市場動向のグラフは、上がドバイ株式市場(DFM)、下がアブダビ株式市場(ADX)の当日の動きです。DFM は「陸のエマール」他代表的大手不動産企業とそれを支える地場銀行が下

落の中心で、市場再開と同時に 10 分ほどで一気に崩壊しました。一方 ADX のフォールを主導したのも不動産投資会社を中心でしたが、その下落振りがドバイ程極端ではなく穏やかだったのが印象的です。不動産会社に混じって ADNOC LNG 株も下落の足を引っ張りましたが、こちらは株式市況暴落で世界的景気後退による LNG 需要収縮を懸念しての動きだったと思われます。

それにしても、メルトダウンなる言葉がかくも安易に使われること自体、時の流れを感じますが、思い起こせば福島第一事故の原因となった 2011 年の東日本大震災は、ドバイショックのわずか 2 年後の事件であったのが信じられない思いがします。東北の復興が未だに今日的課題であるのに比べ、ドバイショックはまるで遠い昔の出来事のように思えるほどドバイ不動産経済は復活しました。

英 FT 紙のレポート「fDi Markets」によると、2023 年ドバイへの新規事業 (Greenfield FDI) 進出件数は 1,070 件で 3 年連続の世界一。2 位のシンガポール (442 件) 3 位のロンドン (431 件) を大きく引き離しています。件数ですので、金額ベースとは異なりますが、それだけ多くの企業がドバイに新規投資の魅力を感じていることを示しています。その主体は消費財、エネルギー、E コマース、ツーリズムとのこと。M&A 対象案件に乏しいからと言う見方もあるかも知れませんが、いずれにせよ人の流入の加速に繋がっており、それは不動産の売り上げ動向にも表れています。以下はドバイ土地局発表のドバイの不動産販売件数と平方フィート単価の推移です。



2009 年はまさにドバイショックの年。きっかけは「転売ババ抜き」の不動産バブルの崩壊ですが、原因は前年のリーマンショックで、欧州の銀行からの資金流入が一気に途絶えたからです。2010 年から 11 年にかけて不動産成約件数は激減し、その後少し持ち直したものの、2015 年の石油価格の下落で再び市況が渋りましたが、単価は徐々に回復し、2019 年には翌年のドバイ万

博に向けて、一気に往年の活況を取り戻すかと思った矢先に起きたのがコロナ禍騒ぎでした(ドバイ万博も1年延期)。

しかしその苦境も2021年に入りコロナ禍が癒えると俄かに回復し、前記のように新規事業投資が3年連続世界一を達成したことが象徴するように、ドバイは人の集まる街として、不動産の売り上げ件数もうなぎ上りとなり、実に14年ぶりに往年の活況を取り戻したのです。しかも、この間にはサウジアラビアがMbSのビジョン2030で不動産開発に猛烈に拍車をかけたのですが、これに対してUAEは、外国人投資家への黄金ビザの発給や非課税優遇を武器に、ドバイ万博の成功も追い風にして、一気に不動産投資ブームが爆発し、ドバイを超えてUAE全体に広がりました。

その最たるものがUAE東北端のラスアルカイマ首長国(RAK)の「ウィン・アル・マルジャン・アイランド」で、MENA地域で初のカジノを持つ総合ゲーミングリゾートです。ウィンとは、ラスベガスのカジノ王スティーブ・ウィン(Stephen Alan Wynn)が創設したウィン・リゾートのことで、本拠地のラスベガス、マカオ、ボストンに続く、同社初のビーチフロント型リゾートで、62ヘクタールの島に、高さ300mのタワーを中心に、1542室のホテル、22棟のビラ、15,000㎡のショッピングモール、7,500㎡の国際会議場を併設、高級非ゲーミング娯楽施設も設置すると言うもので、3年後の2027年開業を目指して建設が進んでいます。日本が「健全なカジノ」を巡って甲論乙駁している間に、UAEではイスラム開祖以来ご法度の賭場を開帳してしまいそうです。(写真は完成想像図)



アル・マルジャン・アイランドは人工島ですが、海岸からここに至るまで幾つも人工島が建設され、ヒルトン、マリオット、アドレスなどの著名豪華ホテル、超高級ビラ、その他の娯楽施設等、富裕層向け施設の建設が目白押しです。以下のYouTubeでは不動産屋が現地ですく解説していますが、カジノがオープンする2027年のインバウンド観光客は年間380万人、2030年には550

万人を見込んでいます。<https://www.youtube.com/watch?v=HafhFV00hAU>

この解説でお分かりのとおり、彼らが宣伝しているのはホテルへの不動産投資であって、居住目的ではありません。黄金ビザ、非課税に惹かれて、近年の不動産投資の外国人の顔ぶれトップが、従来のインド人を英国人が上回ったとの話もありますが、太宗は投資目的です。UAE 通貨は米ドルペッグですので、米金利下げが噂される中、不動産バブルはさらに加速するでしょう。しかしそれだからこそ、サウジアラビアと同じく、中東地政学リスクなどとてもない話なのです。湾岸諸国が、ガザの惨状に実質目を背けている理由もおわかりになるのでは。

### 3. 「トリプル・タラーク」オンライン(ドバイ王女の SNS 離婚宣言)

さて、2 か月前の 7 月 16 日には、ドバイのムハンマド首長の王女シェイカ・マラーのインスタグラムが大きな話題となりました。SNS 上で夫のシェイク・マナ(傍流王族)を一方向的に離婚したと言う前代未聞の椿事です。これは日本のメディアでも紹介されたのでご記憶の方もいるでしょう。日本では、不思議の国の王女が起こしたモダンな離婚劇と言う興味本位の報道でしたが、ドバイの対岸インドのメディアでは、他人事ではない話として大々的に報道されました。



トリプル・タラークされた元夫

イスラム法の婚姻では、男女はお互い離婚を申し出る権利があります。婚約時の持参金は離婚時の生活資金となる引当金で、ある意味合理的とも言えます。しかし現実には男性優位で、夫から妻に対し、「タラーク(離婚)、タラーク、タラーク」と 3 回唱えれば離婚が成立するというしきたりがあり(イスラム式三行半)、この「トリプル・タラーク」が、特にインドのムスリム社会で乱用されているとして、かねてより問題視されて来ました。ちなみにトリプル・タラークは不可逆で、夫がささいなことに逆上して叫んだ場合、後日後悔した夫が取り下げようとしても許されません。なぜならば、これは人間の行為を越えた神との契約になるからです。非ムスリムから見ればナンセンスかつ暴力的な制度であり、インドではムスリムへの輦感に繋がっているようです。そもそもインド(パキスタンを含む)のイスラム文化は、ペルシャ出自の征服王朝がもたらしたもので、イスラムへの改宗でカーストの軛から解放された下層階級の人々が多かったことも、ヒンズー教徒からムスリムに対する上から目線(イスラム王朝への反発も含み)に繋がっている由。もっともヒンズーはヒンズーで、今は禁止されているものの「サティ(妻の殉死)」のような風習もありますので、宗教と社会の関係は、第三者が単純に断罪することはできません。

そのせいかどうかはわかりませんが、インドの「宗教国勢調査 2011」によると、2010 年にはヒンズー教徒の人口比が 80%割れの 79.8%になった由。ここ 20 年ほどの調査の度に、毎回 1~2% ずつヒンズー教徒が微減する一方、イスラム教徒が微増しているそうです。これなんかもヒンズー教徒の危機感を呼び、モディ首相のヒンズー至上主義に繋がっている一因かも知れません。

話は逸れましたが、その「トリプル・タリーク」をドバイのマーラ姫はなんと女性の身で、しかもインスタグラム上で易々とやらかしたのです。「夫よ、あなたが他の仲間と忙しいので、私はここに離婚を宣言します。私はあなたと離婚します、私はあなたと離婚します、そして私はあなたと離婚します。お大事に。あなたの元妻より。」(シェイカ・マーラのインスタ文面直訳)

二人が結婚したのは昨年6月。華やかなジュンブライドはドバイでは大きなニュースになりました(本レポート第20号でも紹介)。今年の5月には長女を授かっており、夫婦円満に見えたのですが、男女の仲は一寸先は闇。元夫の立場はどうなるのでしょうか。その元夫ことシェイク・マナはドバイ王家の傍流ですが、ちょっとした実業家で、不動産事業、テック事業、貿易事業などに名を連ねています。王族と言うことで、アブダビ首長、ドバイ首長とのチャンネルを最大活用していたようで、遂にはお姫様まで射止めたのですから、まさしく逆玉の輿だったはず。しかし最近には冒険遊びの方に熱中していたようで、有名プロスポーツ選手との交流も本人のインスタグラムを賑わせており、まあ典型的道楽息子と言うべきでしょうか。とは言え、家に残された身重の若妻が孤独に苛まれていたかと言うと、このお姫様の場合はどうかと言う感じもします。英王室や日本の皇室でも内実は色々ありましたから、単純な推察は許されません。

実際「元妻」のシェイカ・マーラ(30歳)は中々多彩な背景をお持ちです。MbRドバイ首長の26人の子供のひとりとして、王室のメンバーらしく慈善事業家の顔を持つ一方、動物愛護家であり、世界旅行を愛する活発な女性です。GCC王家の女性達は、シャルジャのシェイカ・ルブナ(元UAE対外通商相)やカタルのシェイカ・モーザを例外とすると、あまり表舞台への露出を行わないのが普通ですが、そんな中でシェイカ・マーラはインスタのアカウントを持ち、再々露出を重ねる新人類です。しかもその露出の形がちょっとユニーク。つまりしょっちゅう母親と一緒になのです。正にドバイ版「一卵性母子」(注:美空ひばり母子のこと)。

シェイカ・マーラの母ゾー・グリゴラコス、その名の示すとおりギリシャ人です。ワールドトレードセンターのザビールパレスで華々しく行われた娘の結婚式にも、負けじと着飾ってメディアの注目を集めた、と言うか、その目立ちたがりぶりを発揮しました。母親の出自は今一つ不明なのですが、とにかくステージママで、シェイカ・マーラの新婚旅行先も当然ギリシャとなり、アテネ、サントリーニ島、ミコノス島でハネムーンを送りました。が、どうもママ付きだった模様で、新郎としては、なんとも鬱陶しかったのではないのでしょうか。今般、妻からのトリプル・タリークで面子を失った感じのシェイク・マナではありますが、もしかしたらほっとしているのかも知れません。



一卵性母子、どっちがどっかわかる？(インスタより)

男尊女卑的に映るアラブ世界ですが、王室の女性の「活躍ぶり」は、シェイカ・マールだけではありません。2019年、MbRドバイ首長の第2夫人、ヨルダン王家出身のハヤ王女が突如英国に脱出



し(左写真:王妃と呼ぶべきですが、ドバイではヨルダン王家に敬意を表し、常にプリンセス・ハヤと呼ばれていた)、二人の子供の保護を求めて裁判を起こして騒ぎになったのをご記憶でしょうか。その判決は MbR の DV を認め、7.8 億ドルの和解金を払えと言うもので、MbR の完敗でした。しかし、その後の情報公開で、そもそもトリプル・タリクを発動したのは MbR の方で、その理由はなんとハヤ王女と9歳年下の英国人ボディガードとの不倫だった事が明らかになりました。まるで Netflix の映画みたいです。結局二人の子供はロンドン在のまま MbR が養育費を払うと言う結論にはなったのですが、ハヤ

王女とボディガードのその後については不明です。本レポートはゴシップ誌ではないので、詳しい顛末は以下をご覧ください。

<https://ameblo.jp/aaaribbon/entry-12640449320.html>

ここで私が注目したのは裁判所の公開情報で、MbR はハヤ王女のメールをスパイウェア「ペガサス」で逐一監視していたと言う指摘のくだりでした。正しく、以前の本レポートで報告した UAE のクラウド企業「G42」の前身「ダークマター」(国営ネットセキュリティ機関→国営ハッキング集団)が愛用したイスラエル NCO 社製スパイウェアです。

(詳しくは本レポート 11 号ご参照。ペガサスについては以下 Wiki をご覧ください。

[https://ja.wikipedia.org/wiki/Pegasus\\_\(%E3%82%B9%E3%83%91%E3%82%A4%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A2\)](https://ja.wikipedia.org/wiki/Pegasus_(%E3%82%B9%E3%83%91%E3%82%A4%E3%82%A6%E3%82%A7%E3%82%A2)) )

ダークマターは、ペガサスを通じて国内外の標的(米政治家も含む)を監視していたと言うことで欧米政府から非難を受けましたが、MbR が妻のスマホの監視にも使っていたと言うことを知るにつけ、王家の最大の敵は身内だと言うことを、今さらながらに痛感させられた次第です。

そんなゴシップに満ちたドバイ王家ですが、ハヤ王女のご実家ヨルダン王家で「良いお嫁さん」を演じているのが、サウジアラビアから来たラジワ皇太子妃(次頁写真右)です。昨年フセイン皇太子と結婚しましたが、さる8月3日にめでたく第一子の「イマン王女」を出産しました。皇太子の妹イマン王女と同名ですが、それだけに王家の喜びが感じられる命名です。これで美貌のラーニア妃(写真左)も愈々「お祖母様」になるのかとの感慨はさておき、このお嫁さんの出産は、単に王家の慶事だけにとどまらぬ重要な意味を持ちます。それはヨルダン王家とサウジ王家の「100年目の融合」です。

そもそもヨルダン王家のハーシム家は土着の支配者ではありません。なぜここにいるのかと言



うと、預言者の血筋で、メッカの太守であったハーシム家の族長フセイン・イブン・アリーが、第一次世界大戦中に例の「フセイン・マクマホン条約(1915年)」に調印後、英国の力を背景に立ち上げたヒジャーズ王国が、現サウジアラビアのサウド家に脆くも潰されたのが略100年前の1925年の出来事。以来流浪の貴人となったハーシム家の王子たちを、英国が「サイクスピコ条約(1916年)」の成果物であるヨルダンとイラクの王に据えたからです(イラク王家はその後の革命で廃絶)。つまり、サウド家とハーシム家は、仇敵の間柄なのです。



ヒジャーズ王国は、下地図のとおり、メッカ・メディナの二大聖地だけでなく、紅海の東岸を抑える、英国にとってインドとの通商戦略上の重要地域ですので、第一次世界大戦勃発後、オスマン帝国を牽制する「アラビアの反乱」は英国にとって最重要だったわけですが(映画「アラビアのロレンス」の背景)、そのパートナーだったハーシム家をイラク、ヨルダンの支配者に任じたことは、結果的にアラブの権力者層に、サイクスピコ条約を呑ませることとなりました。ハーシム家がヒジャーズでピンピンしていたらこうはならなかったでしょうから、サウド家の武力侵攻はある意味英国にとってもつけの幸いと言えたかもしれません。

そのサウジアラビアの王達は、初代アブドルアジーズ国王の息子たちが今に続くのですが、中でも中心をなすのがスデイリ族のハッサ妃から生まれた7人の王子たち、通称「スデイリ・セブン」です。現在のサルマン国王はその末子で、自身もスデイリ族から妻を迎えており、その息子がサウジどころかアラブ人そしてムスリム初の宇宙飛行士となったスルタン王子であり、OPEC会議でおなじみのアブドルアジーズエネルギー大臣ですので、「サルマン王朝」にとって、スデイリ族はまさに家族です(ちなみにMbS皇太子の母はアジマン族出身)。



そしてラジワ皇太子妃も正しくその系譜にあたります。妃はサウジアラビアの建設大手

アル・サイフ家のお嬢さんで、ご自身もシラキューズ大学で建築学を学んだ建築家ですが、母親がステイリ族直系で、サルマン国王とはまた従弟にあたり、そしてアル・サイフ家自体もステイリ族です。一夫多妻のアラブ・イスラム社会では、実母の存在は重要で、サウジアラビアもアブダビも王の同母兄弟が枢要な地位を独占しています。これでサウジ・ヨルダン両王家が親戚として紐帯が深まるのか、まさに「100 年目の和解→融合」となるのか、今後が注目されますが、泉下のロレンスはなんと言うでしょうか。

#### 4. イラン女性達へのエール？イラン・イスラエル合作映画「TATAMI」

以上、浮世離れした話が続きましたが、王家間の血族関係は、建前は民主制だが実質独裁的支配者が牛耳る強権国家とは一味違い、安定度が光ります。強権国家の他には破綻国家が続き、これに内戦と紛争が影を落とす中東ですが、その結果ハマス（正しくはハマース）やヒズボラ（正しくはヒズブッラー）、さらにはフーシー派と言った非国家主体（普通の国なら反社会集団）が幅を利かし、「停戦交渉」の当事者を演じていると言うのも、まともに考えればとんでもない事態です。

その停戦交渉の舞台であるガザ戦争は、あと少して 1 周年を迎えてしましますが、今回のレポート執筆中の 8 月 15 日（日本にとっても瓦礫記念日）、ガザの死者は遂に 4 万人を突破しました。ガザの惨状をイスラエル市民はどう思っているのか。左派系（と言うか反ネタニヤフ）のハーレツ紙を読んでいても、人質奪回の為の停戦を叫ぶデモの記事は目立ちますが、ガザ攻撃自体を糾弾する声が無いのは、やはりテロ被害者の立場から始まるイスラエル人の心情ゆえでしょうか。

ガザの戦況はメディアの報道に任せますが、9 月 12 日にはハマスの 4 個大隊全てを壊滅し、戦闘員 2300 人を殺害したとのイスラエル軍の発表がありました。ハマスの戦闘員は 1 万 5 千人から 4 万人ほどと言われて来た中、いったいどれほど殲滅できたのかは定かではありません。むしろイスラエル軍部の「いい加減撤退したい」と言う雰囲気はぷんぷん匂いましたが、それでは困るのがネタニヤフで、次第にイスラエル北部戦線でのヒズボラとの戦い、さらにはその陰にあるイランとの緊張増幅にシフトしているように見えます。

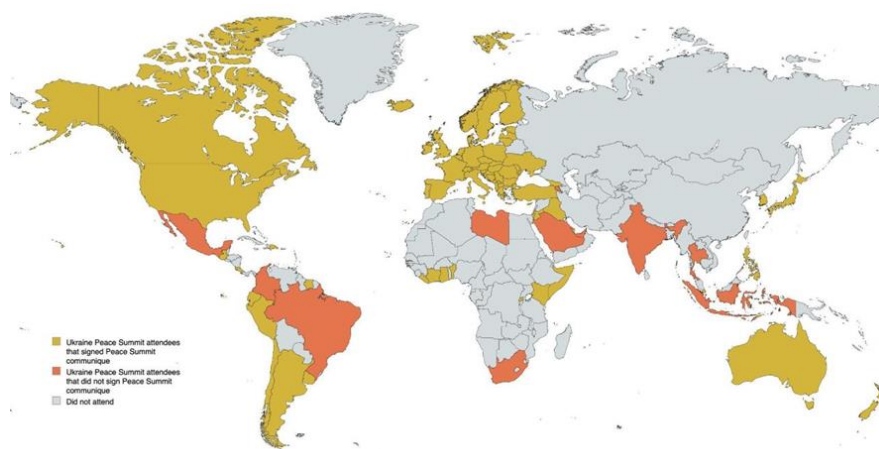
しかし、ヒズボラの勢力はイスラエル国境に 10 万人と言われており、2006 年のレバノン戦争でもイスラエル軍は地上戦でヒズボラに苦戦を強いられています（レバノン国軍は逃げ腰）。しかもその後ヒズボラは、シリアで IS と凄惨な戦いを繰り広げており、実戦経験はハマスの比ではありません。また保有ミサイルは 15 万発と言われ、それらはシリア経由イランから輸入される「精密化キット」で着々と精密誘導ミサイル化されており、同時大量発射の飽和攻撃をかけられたら、イスラエル自慢のアイアンドームでも防御しきれないことがイスラエル軍部内でも懸念されており、ヒズボラとの本格戦闘を躊躇する理由のひとつと言われます。

西側メディアはハマスもヒズボラもイランの手先として十把一絡げの扱いですが、どちらも反イ

イスラエル集団ではあっても、ムスリム同胞団の流れを組むスンニー派のハマス(カタール・トルコと近い)と、イランの影響下にあるシーア派民兵ヒズボラは成り立ちが異なり、イスラエルの対応も違います。7月30日、イスラエルはヒズボラのシュクリ司令官を爆殺し、やったやったと公言しましたが、ほぼ同日に訪問先のテヘランで暗殺されたハマスのハニヤ代表については、沈黙を守ったままです(世間はイスラエルの犯行と断じていますが)。このメッセージ性の違いをどのように読み解くかですが、ハニヤ暗殺はイランを狙ったものではないという意味なのか、それともイランに内通者がおり(ガードマンが買収されていたとの説もあり)、次の作戦に向けて、そのグループを秘匿し続ける必要があるからなのか(イラン指導部に対する暗黙の暗殺予告…?)。

お膝元で賓客のハニヤを殺されメンツをつぶされたイランですが、今度はイランの番だと言う感じの仇討がペンディングになっている現状は、イランにとって優位と言えるかも知れません(イスラエルはイランの復讐に備える立場が続く?)。あるイラン人研究者がいみじくも指摘していたのは、①ハニヤは外国人であり、ガザ紛争はイランとの直接的なものではない(ダマスカスのイラン大使館爆撃とは質的に異なる)、②イスラエルはハニヤ暗殺の責任を認めていない、つまりイラン政府は国民から糾弾される状況にはないと言うことで、言わばうやむやにすることも含むワイドオプションを手に入れていると言うものです。確かに、発足したばかりのペゼシュキアン政権にとって、最大課題は経済回復であって、外国人の敵討ちをトップイシューにはしたくないでしょう。ハメネイ最高指導者にとっても、時々泡が吹きこぼれる感じの沸騰感が続く内にヒズボラの武装強化を図るのが先決でしょうし、噂されるロシアへのミサイル供与が事実だとすれば、プーチンにとってはイランがイスラエルとの小競り合いにかまけて貰っては困るという事情もあるでしょう。

と言うことで、湾岸アラブ諸国の盛況と、イスラエルを震源地とする地政学リスクを眺めて来ましたが、「アラブの大義」にアラブ諸国が実質シカトを決め込んでいるのに対し、非アラブのイランがなぜここまで付き合わなければいけないのか。建前はともかく本音はどうなのか。いまひとつ良くわかりません。



上図は 6 月 17 日スイスで開催された「ウクライナ平和サミット」の決議結果です。黄色が賛成、

オレンジ色が棄権、灰色は不参加です。ロシアをはじめ招待されていない国も多く、最初からウクライナのお手盛り会議ですが、南米・中東・東南アと東西に跨る棄権国の帯は、逆にグローバルサウスの存在を際立たせるもので、決して「一部の国が不支持(NHK)」と言う整理では済まされないものです。この中でトルコとイラクが支持に回ったのは、得意の両張り政策ですが、イランとイスラエルは、この両国を越えて対峙する地政学的関係であることにも留意が必要でしょう。

いったいイランとイスラエルは未来永劫不倶戴天の敵であり続けなければいけないのか。親ユダヤの右派キリスト教団体「ブリッジ・フォー・ピース」のHP「ハイメール通信」には、伝説上のペルシャの王妃エステルを祝うイスラエルの「プリム祭(3月4日)」の紹介がありましたが、この中には現イラン政権に対する見解が織り込まれています。クセルクセス王妃エステルは実はユダヤ人ですが、王の奸臣ハマンのユダヤ人抹殺の謀略を未然に防ぎ、いとこのモルデカイと協力してハマンを誅殺し、ユダヤ人を虐殺から救うと言うお話です。ハマンは出エジプトの時代からユダヤの仇敵「アマレク」の王アガグの子孫として描かれ、ユダヤ人抹殺をライフワークにしていました。すなわち、ユダヤ人は常にアマレクから抹殺される脅威に晒されており、現代のイラン政権はまさにアマレクの末裔であると言う認識です。アマレクの恐怖はネタニヤフの発言にも出て来ることがありますが、果たして一般イスラエル市民がどこまで同感しているかは疑問です。ただこう言う見解を臆面もなく言い放つ集団がいることに、ユダヤ人の心証の屈折を感じます。

では、イラン人のイスラエル観はどうか。イランの元人気女優で、フランスに亡命したザール・アミール(写真左)が、イスラエルの監督と共同制作した映画「TATAMI」のイスラエル公開に先立ち、ハーレツ紙にインタビューを載せましたが、その内容は実に示唆に富むものでした。彼女は



もともと政治的な人ではありません。性的スキャンダルに襲われてイランを逃げ出した人です。それさえなければ未だにイランのTV番組で活躍していたでしょう。それだけに現在の境遇に置かれて初めて感じる場所があった模様で、その内容は自省に満ちたものでした。原文は長いので、ご興味のある方はハーレツ紙記事をお読みください。

[https://www.haaretz.com/life/film/2024-08-01/ty-article-magazine/.premium/what-caused-a-young-iranian-actress-who-fled-her-country-to-fall-in-love-with-tel-aviv/00000191-0ce6-dba6-a59d-0eef52470000?utm\\_source=mailchimp&utm\\_medium=Content&utm\\_campaign=daily-brief&utm\\_content=dec8a2e59d](https://www.haaretz.com/life/film/2024-08-01/ty-article-magazine/.premium/what-caused-a-young-iranian-actress-who-fled-her-country-to-fall-in-love-with-tel-aviv/00000191-0ce6-dba6-a59d-0eef52470000?utm_source=mailchimp&utm_medium=Content&utm_campaign=daily-brief&utm_content=dec8a2e59d)

彼女は亡命後、やはり亡命イラン人監督アリ・アッバシが、イランの聖地マシュハドで起きた連続娼婦殺害事件を題材にした「聖地には蜘蛛が巣を張る」に出演し、カンヌ映画祭で主演女優賞に輝いて一躍世界的脚光を浴びました。同作品はイラン政府からは激しい批判を浴び、イラン文化を侮辱した罪は、かのサルマン・ラシュディの「悪魔の詩」と同等とまで断罪される始末でしたが、今回はなんとイスラエルの監督との共同制作と言うのですから、もう開き直りに近い感じです。インタビューでのイラン政権に対する批判は亡命者らしい論調で、ペゼシュキアン大統領も現体制が故ライシ師に代わりポケットの中から引っ張り出した人形に過ぎないと容赦ありません。

映画「TATAMI(畳)」は柔道国際選手権に出場するイランの女性選手(レイラ)とそのコーチ(マリアム: ザール・アミール)の話で、イラン政府が禁じているイスラエルの選手との対戦が予想されたことから、負傷と偽り欠場を求めるコーチと、それを拒絶し飽くまでも出場を主張する選手との葛藤の物語です。政府の圧力が家族にも及ぶ中、最後は出場を決意し、ヒジャブも脱ぎ捨て畳に立つレイラの姿に涙するマリアム、と言うのがクライマックスなのですが(結局レイラはイスラエルとの対戦前に敗退)、この演出を通じて、ザール・アミール(姓のエブラヒミは亡命の際に棄てた)は自らの半生を省みて、次世代の若者へメッセージを送っています。

「私の世代(アラフォー)は革命後の混乱とイランイラク戦争の中で育ち、生きるためには嘘をつく以外に選択肢がなかった。自分自身に嘘をつき、両親に嘘をつき、教師に嘘をつき、自分たちを守り、日々のプレッシャーから生き残るために嘘をついた。あまりにも嘘をつきすぎて、時には自分の嘘を信じ始めることもあった。しかし、若い世代は違う。彼らは自分たちが為すべきことを知っている。より自由になりたいと思っている。彼らは危険を冒していることに気づいているが、それはただ自由な人間として生きたいだけなのだ。そして、彼らを止めるものは何もない。彼らに圧力がかければかかるほど、彼らは自由のためにリスクを冒す用意ができています。これは、マフサ・アミニの死で加速された。」(以上ハーレツ紙インタビューより)

と、抑圧的な体制からの解放を希求する女性たちを描くこの映画の着想が、2022年、ヘジャブの着付けを巡って道徳警察に拘束され死亡したクルド人女性マフサ・アミニへの全国的な抗議運動にあることを示唆しており、その精神的影響力の大きさが映画を通じて伝わって来ます。

残念ながら「TATAMI」の日本公開はないようですが(東京国際映画祭で上映)、スポーツの中でも柔道を題材としたのは、東京オリンピックで銀メダルを獲得したモンゴル代表サイド・モラエイ(実はイラン人)をヒントにした模様ですが、イスラエル人の共同制作者のガイ・ナッティヴによれば、「他のスポーツからは隔絶した柔道の精神性」が、この映画に相応しかったとの事で、映画の中でも選手を敢えて「Judoka」と呼んでいます。こう聞くと思わず熱くなってしまう、日本人ももっとなんか言っても良いのではないか、と思うのですが、しかしグローバル化した柔道はもう日本人の手から離れてしまったしなあと、オリンピックでの変な判定を思い出す次第でもあります…。

以上